

# 知的障害児を対象とした報告場面における文産出を促すための 支援方法に関する事例的研究

檜垣 栄慈

## 問題と目的

知的障害児の中には、身近な人との相互交渉をするための言語は習得していても、報告場面における時空間を隔てた不特定多数の人に伝えるための言語を習得することに困難を示す子どもたちがいる。このような報告場面においては、聞き手の内容理解に即しながら、文脈を構築していくことが求められる。しかし、日常の報告場面では、自己の報告内容と聞き手の理解内容を照合することが難しいため、知的障害児にとっては、その照合を可能とする特別な課題場面が必要となる。そこで、自己の報告内容と聞き手の理解内容とを照合することが可能であるミニチュアを用いた報告場面を設定した。この報告場面では、聞き手が話し手の報告内容に応じてミニチュアを操作することにより、話し手は聞き手が内容をどの程度理解しているかという情報を入手できると考えた。

本研究は、知的障害児2名を対象として、報告場面において聞き手の内容理解に即した文産出を促すためのミニチュアを活用した支援方法の立案・検討、及びミニチュアの活用効果について検討することを目的とした。

## 方法

### 1 対象児(2名)

知的障害養護学校中学部2年に在籍する女児と、小学校特殊学級5年に在籍する女児の2名を研究対象とした。ITPA 言語学習能力診断検査の結果、両者ともに言語受容よりも言語表出が相対的に低かった。

### 2 支援実施期間

支援期間は、2004年4月～12月までの約8ヶ月(8月を除く)である。月1～2回程度、計12セッションの臨床場面を設定した。

### 3 手続き

個別支援場面において、「自由再生課題」と「ミニ

チュア課題」を設定した。「自由再生課題」では、写真によって配列された「できごと」を創作し、支援者に報告してもらった。「ミニチュア課題」では、「自由再生課題」終了後、補助支援者に対して、同様の課題を報告してもらった。その際、補助支援者は対象児の報告内容に応じてミニチュアを机上で操作した。報告内容が不明確な場合には操作を滞らせ、自己の報告内容と聞き手の理解内容との「ズレ」に気づかせるようにした。

セッション終了後には、臨床場面を観察していた者全員でカンファレンスを行い、次回の支援内容を検討した。また、観察していただいていた保護者からも意見を得た。

分析の対象は、「自由再生課題」と「ミニチュア課題」における報告内容とし、次の3点を検討した。

#### 1) 支援方法の立案・検討

両課題における報告内容の変容から、支援における「写真配列の提示方法」、「ミニチュアの活用方法」、「言語教示の方法」を検討した。

#### 2) ミニチュアの活用効果

「自由再生課題」から「ミニチュア課題」への移行に伴う報告内容の変容に基づいて、ミニチュアの活用効果を検討した。

#### 3) 支援の成果と課題

ミニチュアを活用した支援の実施前から実施後への移行に伴う絵画配列課題の報告内容の変容に基づいて、支援の成果と課題を検討した。

## 結果

### 1 支援方法の立案・検討

#### 1) 写真配列の提示方法

当初、報告内容を規定する一連の写真を提示した後、伏せた状態で報告をしてもらった。その結果、A児からは、報告途中で「え～っと」と言いよどむ様子や、「分からない」との発言から報告内

容が欠落する様子が観察された。

このことから、写真配列を提示したままの状態  
で報告してもらった。その結果、両者ともに、写  
真配列を見ながらの報告場面となってしまった。  
情報入力負担を補填することができたものの、  
ミニチュアへの注目を促すことができなかった。

よって、写真配列を「必要に応じて見てもよい」  
とすることで、情報入力負担への補填、ミニチ  
ュア操作への注意を促すことができた。

## 2) ミニチュアの活用方法

当初、報告内容に必要な分のみミニチュアを準  
備していたことで、話し手が登場人物を具体的に  
指摘しなくても聞き手が動作主を理解することが  
できていた。さらに、対象物を指示語などで特定  
化して報告する様子も観察された。これらのこと  
から、準備したミニチュアの中に報告に必要なミ  
ニチュアと不必要なミニチュアを混在させた。そ  
の結果、登場人物の区別化や対象物の特定化を促  
すことができた。

ミニチュアの操作では、報告内容が不明確な場  
合に操作を滞らせるという設定とした。その結果、  
滞りの意味が操作の遅れとして認識され、意図が  
曖昧になっていた。このことから、「動作主」が不  
明確な場合のみ滞らせ、それ以外の場合にはスム  
ーズに展開させることにより、動作主の喚起を促  
した。しかし、対象児の報告内容と補助支援者との  
操作が食い違う場合もあった。そこで、「操作が  
違っている時には、指摘してもよい」との教示を  
与えたところ、対象児からの指摘が生じた。

## 3) 言語教示の方法

言語教示の方法では、補助支援者による「滞り」  
の意味をより明確化するために、報告内容が不明  
確な場合に問いかけをして気づかせるようにした。  
その結果、報告内容の改善を促すことはできたが、  
文脈の構築を中断させてしまうことがあった。文  
脈の構築時に報告内容の改善を促すためには、効  
果的な問いかけを含めた「滞り」の方法をさらに  
検討する必要がある。

以上の結果から、報告場面においてミニチュア  
を活用することで、自己の報告内容と聞き手の理

解内容を照合することを促すことができた。それ  
らに注目を促すためには、情報入力負担の補填  
や「ズレ」を明確にするための手立てを検討する  
ことが必要であった。

## 2 ミニチュアの活用効果

報告内容を秋田・大村(1987)の「命題におけ  
るできごと分類」を参考にして「行為」、「人の状  
態」、「物の状態」、「心的状態」、「特定できず」の  
いずれかに分類した。その結果、ミニチュアを活  
用した課題においては、登場人物の「行為」の他、  
「人の状態」、「物の状態」、「心的状態」への言及  
も促すことができた。また、接続語を用いた表現  
が生起するようになり、命題間における接続の数  
や種類が多様になった。

これらのことから、報告場面における支援方法  
としてミニチュアを活用することは、単なる「で  
きごと」の量的増加のみならず、質的な変容にも  
有効であると考えられた。さらに、文脈の明確化  
にも効果的であると考えられた。

## 3 支援の成果

ミニチュアを活用した支援の実施前から実施  
後の絵画配列課題における報告内容の変化からも、  
上述の結果に見られた変容が顕著に見受けられた。  
これらの結果は表1～表3で示した通りである。

### 1) A児

当初、A児の報告内容には、登場人物が生起さ  
れずに、動作主が曖昧な部分が多かった。また、  
動作主を混同させた文が多く見受けられた。介入  
後においては、登場人物が生起されなかった部分  
があったものの、文中における動作主を一貫させ  
た表現ができるようになっていった。このことか  
ら、「できごと」の区切りに注目することができる  
ようになっていった。よって、文数が増加した一  
方で、文中におけるできごと数の割合が減少した  
(表1)。その結果、語と語における連結から文と  
文への連結の割合が多くなっていった(表2)。さ  
らに、動作主に注目することができるようになって  
いったことで、次第に動作主に関連する「人の  
状態」や「心的状態」への描写ができるようにな  
っていった(表3)。

**表1 文数とできごと数の介入前後による比較**

|           | A 児  |      | B 児 |     |
|-----------|------|------|-----|-----|
|           | 介入前  | 介入後  | 介入前 | 介入後 |
| 文数        | 3.2  | 3.5  | 3.3 | 3.6 |
| できごと数 (%) | 22.7 | 18.0 | 1.6 | 2.2 |

注) 各数値は、すべて平均値を指す。文中におけるできごと数の割合は、「文数」あたりの「できごと数」を%表示したものである。

**表2 接続語の生起数における介入前後の比較**

|      | A 児 |     | B 児 |     |
|------|-----|-----|-----|-----|
|      | 介入前 | 介入後 | 介入前 | 介入後 |
| 接続詞  | 7   | 7   | 3   | 8   |
| 接続助詞 | 28  | 22  | 13  | 25  |

**表3 できごと数の介入前後による比較**

|      | A 児 |     | B 児 |     |
|------|-----|-----|-----|-----|
|      | 介入前 | 介入後 | 介入前 | 介入後 |
| 行為   | 47  | 44  | 42  | 51  |
| 物の状態 | 4   | 5   | 5   | 8   |
| 人の状態 | 4   | 11  | 8   | 9   |
| 心的状態 | 0   | 2   | 2   | 7   |
| 合計   | 55  | 62  | 57  | 75  |

## 2) B 児

B 児においては、動作主に注目することができるようになったことで、登場人物の発言内容や心的状態までも言及することができるようになっていった。その結果、間接話法を用いた表現が著しく増加した。とりわけ「心的状態」では、登場人物の「行為」の契機となる「心的状態」を表現することができるようになっていった。このことから、動作主に関連する「行為」を詳細に表現することや、「心的状態」への描写ができるようになっていった(表3)。また、文数の増加に伴い、まとまりを意識して動作主に関連するできごとを報告することができるようになっていった(表1)。その結果、文と文の連結部分における接続詞が著しく増加した(表2)。これらのことから、接続表現における多様化を促すことができた。

以上の結果から、ミニチュアを活用した支援は、聞き手の内容理解に即した文産出を学ぶ場として、有効に機能したと考えられた。

## 考察

聞き手の内容理解に即した文産出を促すために、自己の報告内容と聞き手の理解内容とを照合することが可能であるミニチュアを活用した。そのミニチュアへの注目を促すためには、情報入力における負担の補填、準備したミニチュアの中に報告に必要なミニチュアと不必要なミニチュアを混在させることが効果的であると考えられる。これらのことは、自己の報告内容と聞き手の理解内容との「ズレ」を認識させることに波及していくと考えられる。

ミニチュアの活用効果としては、自己の報告内容と聞き手の理解内容に「ズレ」が生じた場合に、聞き手がミニチュアの操作を滞らせることによって、その「ズレ」への気づきを促すことができたことと考えられる。その結果、動作主への注目を促す要因となり、動作主に関連するできごとの明確化に効果を及ぼしたと考えられる。すなわち、報告場面において、聞き手の内容理解に即した文産出を促すためには、聞き手がいかに話し手の報告内容を明確に反映させてミニチュアを操作するかが、重要な要因であると考えられる。

## 結論と今後の課題

報告場面における文産出を促すためには、自己の報告内容が聞き手にどのように理解されているかが把握できるような学習場面が必要であり、ここでは本研究で採用したミニチュアの活用が効果的であることが確認された。特に、学習過程では、学習者が自己の報告内容と聞き手の理解内容との間の「ズレ」に気づくことができるようにするために、学習者の報告内容が明確に反映されるように、支援者がミニチュアを操作することが必要であった。今後は、自己の報告内容と聞き手の理解内容との間に「ズレ」が生じた場合に、その「ズレ」に気づいて、報告方法の改善ができるようになるための学習への配慮がさらに必要である。

## 文献

秋田喜代美・大村彰道(1987) 幼児・児童のお話作りにおける因果的産出能力の発達. 教育心理学研究, 35, 65-73.